

フローベールとオリエント

——その偏愛の地，インドそして砂漠——

滝 澤 壽

はじめに

1821年生まれのフローベールがその青少年期にロマン主義の深甚な影響を受けたことは、いまさら記すまでもない。また19世紀前半を支配したロマン主義が、ナポレオンのエジプト遠征等を契機としていわゆるオリエンタリズムをかき立て、エドガール・キネ著『諸宗教の精髓』（1832）の一章の標題を借りてレーモン・シュワップがその著『オリエンタル・ルネッサンス』（1950）で鮮やかに描きだした、あの「オリエンタル・ルネッサンス」を招来したことも、改めて贅言を要しまい。事実、フローベールがマクシム・デュ・カンとエジプトを中心として東邦へ行を共にした1849～51年にあつては、オリエントの魅惑は既に単なるエキゾチシズムの域を脱し、異文明・異空間相互の交流の深まりと共に、両者の諸関係も大きな変貌・変動を画するに至っている。そして18世紀末以来、哲学者や詩人達の精神形成上の特権的な旅となっていたオリエントへのそれは、いずれも特有の魅力を備えた一流の紀行文を残したヴォルネー、シャトーブリアン、ラマルチヌ、さらにはネルヴァルといった先人を輩出していたのである。オリエントを現実眼にする前に『オリエント物語』を構想し、後年、『聖アントワーヌの誘惑』、『サラムボー』そして『ヘロディアス』の舞台となるオリエントが、フローベールにとっても若き日からの想像＝創造の源泉の一つであったのは自然の成り行きであつたと言えよう。

ロマン主義時代にオリエンタリズムを鼓吹した最たるものは、やはりユゴーの『東邦詩集』（1829）であり、これに先立つバイロンの東邦詩篇であつた。シェークスピア、ゲーテと共にフランス・ロマン派の三大偶像であつたバイロンにフローベールが見出したもの、それはトルコへの想いであり、先に触れた東邦旅行の帰途にもらした述懐にもこれは窺い知れる。「アビドスの前を通る時、バイロンのことをじっくりと考えた。まさにこれが彼のオリエント、トルコのオリエント、湾曲刀とアルパニア衣装、それに青い波に臨む格子窓のオリエントだ。」¹⁾ユゴーもトルコを、イスラムのスペインを、そしてインド、ペルシャをも詠い、ミュッセ、ヴィニーがこれに続いた。しかしロマン主義の凋落と共に、夢とビトレスクの源泉オリエントは思索と研究の対象になっていく。未知から既知へ、オリエント神話は次第にその魔力を失い、オリエント探査はオリエント調査に質を変える。旅の最大の記念である旅行記も根底的な変革を迫られる。デュ・カンは先のフローベールとの旅に、当時最新の科学機器即ち写真機を携行し、旅行記は無論のこと、その考古学的調査の成果を写真集『エジプト・ヌビア・パレスチナ・シリア』（1852～54）という極めて現代的な意匠の下に刊行するのである。

フローベールはオリエント像のこうした転換期と生を共にした。従つて彼のオリエント観

とその変遷を辿ることは、ある意味で同時代のその縮図を描くことにもなり得る。しかしそれは本小論の枠内に収まるはずもない企てである。ここではそうした試みの手始めとして、フローベールの偏愛の地、インドと砂漠に焦点を絞りそのオリエント観の一端を明らかにしようと思うのだ。

ところで今までオリエントなる呼称が指す地域をあえて定義せずに来た。何しろこの語ほど曖昧模糊としたものも数多くあるまいと思えるほどで、時代によりその概念は空間的にも変遷しており、また地勢・文明を加味した上に、文人、学者達がそれぞれに夢見た「約束の地」としてのイメージの高揚をも勘案しようとするれば、およそ定義不能に陥らざるを得ないのだ。勿論、事典等の書物により時代時代の定義を提示すること自体は、さほど難しくはない。しかしそこには決して一貫した像は結んでは来ないのだ。「現代情勢の発展が『オリエント』の定義を拡大し、近東、中東、極東の三つの地域に分けたことは私も知っている」としながらも、「東経20度と55度、北緯40度と20度とを限る曲線多角形に〔……〕固執する」²⁾ポール・ヴァレリーの見解も一つの見識ではあろうが、我々としてはとりあえず明快にして漢としたアルペール・チボーデの次の定義に多少の修正を加えて、共通の理解としておきたいと思う。即ち、「オリエントなる用語はインドからモロッコに至るすべての暑い国々と解する」³⁾を、「日本からモロッコ」と一部修正するものだ。フローベールの文学的感性を養ったロマン主義の時代には、極東という用語が未だ存在しなかったからである。ちなみに、フローベールの『紋切型事典』「オリエンタリスト」の項は、「大いに旅をした人」となっている。

I. フローベールとインド

ノルマンディーの厳しい風土からは、灼熱のオリエントは夢の土地であった。フローベールのオリエントへの夢想は、先ず特定の国に向かうのではなく、様々な国々が混じり合ったイメージから成っていたが、次第に二つの地域が特権的な位置を占めて来る。即ちインドと砂漠である。

19世紀フランスにおいてインドが持て囃されるようになったのは、アイルランドの詩人トーマス・ムーアのインド・ムガル帝国を舞台にした物語詩『ララ・ルークあるいはモンゴルの王女』(1817)の仏訳が1820年に出版されたのが契機となり、以後模倣者が続出したことによる。インドあるいはその関連の話題がフローベールの筆に上るのは、早くも1836年、初期作品の一つ『サン・ピエトロ・オルナノ』においてである。海賊にさらわれたヴァニナ、「彼女は父や、奴隷達や、庭園、〔……〕あの豪華な館や、斑岩造りの浴場や、ガンジス河産の白鳥のことを想って泣いた。」この聖なる河はその後幾度となく初期作品に現れる。『死者の舞踏』(1838)、『スマール』(1839)、『思い出・覚書・瞑想』(1838~41)、『ピレネー・コルシカ紀行』(1840)等である。そして多くはエキゾチシズムをかき立てる特有の地方色で潤色される、曰く白鳥、舞姫、竹、虎、象等々。その一例、「しばしば僕はインドにいる。バナナの木陰で真蔭に座る。舞姫達が踊り、幾つもの青い湖に白鳥達が身を丸くする。自然が愛に脈打つ。」⁴⁾しかしながら、フローベールの夢想が最も鮮やかなイメージで具体化されているのは、『十一月』の次の一節だろう。

「僕は、自己の存在が多様であるという点で、あたかもインドの大森林のようであった。そこでは生命が一個一個の原子の中に脈打ち、一本一本の太陽光線の下に奇怪にもあるいは愛らしくも現れて来る。紺碧の空は香気と毒気に満ち、虎達が跳梁し、象達が生けるバゴダごとく昂然と歩み、神秘異形の神々は山なす黄金の間の洞穴に隠れている。そして森林の真ん中を幅広き河が流れ、あぐりと口を開けた鱷が岸辺の蓮の中で鱗を打ち鳴らし、花咲き乱れる島が幾つもの木の幹やペストで緑色になった死体と共に流れに押し流されて行く。それでも僕は生命を愛していたが、それは横溢する、輝く、燦然たる生命である。駿馬の猛り狂った疾駆、星々のきらめき、岸辺に打ち寄せる波の動き、そしてものの内にある生命を愛していた。裸の美しい胸の鼓動、恋の眼差しの震え、ヴァイオリンの弦の振動、コナラのそよぎ、窓ガラスを金色に染め、妃達が肱をついてアジアを眺めたバビロンのバルコニーを想い起こさせる夕日、そうしたものの内にある生命を愛していた。」⁵⁾

そしてまた同じ小説の一節。

「ああ！インド！とりわけインドだ！おびたしい数のバゴダや偶像がある白い山々。おびたしい数の虎や象がいる森の中、白い衣装をまとった黄色い男達、足と手に環をはめ、もやのようにその身を包む紗のドレスをまとい、ヘンナで黒く隈取った臉のみが際立つ眼をした錫色の女達。彼女達はある神への頌歌を合唱し、踊る……踊れ、踊れ、舞姫よ、ガンジス河の娘よ、お前の足を僕の頭の方にくるくる回せ！蛇のように、彼女は身をくねらせ、腕を解き、その頭が動き、腰は揺れ、鼻孔が膨らみ、髪は解け、くゆる薫香は四頭二十手の馬鹿げた金箔の偶像を包み込む。」⁶⁾

フローベールが夢見たインドは、西欧人が夢想するピトレスクなインドの一つの典型であろう。強烈な色彩と芳香に満ちた溢れかえる自然に息づく種々の動植物、独特の衣装、風俗、宗教等々、エキゾチシズムの諸要素を揃え、しかもそこには愛すべき女達が艶やかな姿を現す。エキゾチシズムとエロチシズムの融合である。若きフローベールが好んで愛と至福の夢を結んだのはインドであり、彼にとってインドは、先の引用を繰り返せば、「自然が愛に脈打つ」国、生命が旺盛極まりない創造力と豊饒さを見せる国なのだ。インドへの夢は彼の青春と内奥で結びつき、これを内面で支えたと言っても良い。生来の色濃いベンシズムの闇に、生の喜びが一時的にもせよ炸裂する時、インドはその最も太い導火線だったのである。

その強い願望にもかかわらず、フローベールには遂にインドを訪れる機会はなかった。けれどもこのことは、文献渉猟の人、『「聖アントワヌの誘惑」(初稿、1849)における異教の神々のエピソードの源泉』の著者ジャン・セズネックによれば、「幻想的なものを含め、すべてについて資料に依拠せずにはいられなかった」フローベール、またミシェル・フーコーがいみじくも彼のフローベール論の標題としたように、巨大な学識のすべてが「幻想の図書館」の形で構成され、その作品は「書物の書物」である作家にとっては、何ほどのことではあるまい。先に触れた東邦旅行がそうであったように、インドへの旅も恐らく既視観を再確認するものになったに違いないからだ。それではこの既視観を培った書物はどのようなものだったのだろうか。例えば、未完に終わった『オリエント物語』を構想していた1846年、エマニュエル・ヴァッスに宛ててホットティングアの『東洋史』と共に『シャクンタラー』、『プラーナ』の翻訳の王立図書館からの借用方を依頼し、その落手の礼状の中で、読了したあるいはこれから読破したい本の一覧を書き記している。

「僕は『バガバッドギター』、『ナラ王物語』、仏教に関するビュルヌフの大著作、『リグ・ヴェーダ』の讃歌、マヌ法典、コーラン、そして中国の本を何冊か読んだ。今のところそれだけだ。アラブ人、インド人、ペルシャ人、マレー人、日本人その他の手に成る多少ともおどけた詩とか俗謡集を見つけたら、送って下さい。オリエントの宗教とか哲学に関する良い著作（雑誌でも本でも）を知っていたら、教えて下さい。」⁷⁾

フローベールが集中的にオリエント関係の文献を読み漁ったのは、先の『オリエント物語』の想を練った時期とほぼ重なる、1845年9月頃から翌46年10月頃にかけてのおよそ一年間である。その後は初稿『聖アントワヌの誘惑』執筆や東邦旅行の準備、さらには『サラムボー』執筆時に、当然オリエント熱の高揚期が訪れている。1845年から東邦旅行出発時の49年10月までの間にフローベールが読んだあるいは言及したオリエント関係の文献一覧は、セズネックの労作『「聖アントワヌの誘惑」新研究』等で明らかにされているが、委細は省くとしてもその半数ほどがインドに関するあるいは触れたものであることは、未来の大作家に及ぼしたこの国の魅惑と魔力の大きさを証して余りあろう。なかでも彼はインドの様々な宗教への関心が深く、特にヒンズーの汎神論には強い感化を受けている。陽光降り注ぐ自然に浸りきり、自己の全存在がそこに溶解し、自然の完璧な調和の中に造物主たる神の遍在を実感して恍惚境に至るといふ、自然感情に基づくいささか文学的なフローベールの汎神論は、早くも1840年、ピレネー・コルシカ旅行の際の「サゴンヌ湾体験」として先ず語られている。(ちなみに、陽光はフローベールの汎神論のキーワードである。)そして『野を越え、磯を越えて』のプルトーニュの浜での出来事、フィクションでは『十一月』、初稿『感情教育』、さらには『聖アントワヌの誘惑』とその系譜を辿ることが出来る。この生来の傾向は彼の偏愛するスピノザの哲学によって強められ、ヒンズー教を始めとしてインドの諸宗教を知るにおよんで一層色濃くなって行くのである。加えて、フローベールの生の哲学の根幹を成す一種の宿命論、人間の自由の根源的否定とか、生を表現すべき芸術家は現実の生を放棄すべきとする彼独自の美学等に、インド哲学の影響の一端を見て取っても過誤はないであろう。例の『オリエント物語』は来年に延期、恐らくは再来年、そして恐らくは永久に延期かも知れない」と述べた手紙の中で、彼はデュ・カンに言っている。

「僕は〔……〕かつてなく純粹思念に、無限の中に帰って行く。僕は無限に憧れ、それは僕を惹きつける。僕はバラモンに、いやむしろ少々狂人になるのだ。冗談ではなく、僕はバラモンに生まれたかった。君に『バガバッドギター』の幾つかの断章を見せてやるよ、そうすれば僕の欲望が分かるだろう。」⁸⁾

あるいはまた、

「〔……〕僕は仏教を研究している。僕は孤独に、とても孤独に、ますます孤独に生きている。近親の者は死んでしまった。友人達は僕の許を去るか、変わってしまっている。釈迦牟尼は言っている、『苦しみは愛着からくると悟った者は、犀のように孤独の内に引きこもる。』いつかこの「愛着」という語の意味を説明してやるよ。全くもって特別なものなのだ。」⁹⁾

さらに、およそ半年後ルイズ・コレに宛てても書き記す。

「君は僕を『バラモン』と呼ぶ。それは過分の名誉だが、しかし僕は本当になりたいのだ。そうした生に狂わんばかりの憧憬を抱いている。彼等の森に生き、彼等のように神秘

の踊りを舞ってぐるぐる回り、あの並外れた没入の内に存在したいのだ。彼等は美しく、その髪は長く、その顔には汗が聖なるバターのごとく滴り、その大音声は象や雄牛の叫びに呼応する。昔はカマルドリ会修道士、それからトルコの背教者になりたかった。今やそれはバラモンで、しからずんば無。実に単純になったものです。」¹⁰⁾

フローベールの抱くバラモン観を始め、いささか奇矯なイメージも目につく。確かにインドのエキゾチックにしてピトレスクな側面は大いに彼を魅了したのであるが、同時に自己の文明に時としてある種の疎外感を抱かずにはおれなかったフローベールが、その古きそして高き独自の文明に惹かれ、それに深い尊敬と憧憬の念を持つに至ったのは必然の道筋であったことが、自ずから感得されるのではなからうか。インドは彼にとって言わば一つの夢の故郷だったのである。

II. フローベールと砂漠

オリエンタリズムにはエキゾチックな東洋趣味の要素が大きな位置を占めているが、なかでも砂漠は常套的なものであり、フローベールにおいてもそのイメージはこの大枠を基本的に打破するものではない。東邦旅行で現実に砂漠を見、踏みしめる十年余り前、『狂人の手記』(1839)に表されたイメージは次のごとくだ。

「〔……〕僕は南の国々への遠い旅を夢見るのだった。オリエントやその広大な砂原、青銅の鈴を付けたラクダ達が踏みしだくその数々の宮殿を眼に浮かべた。また、陽光に染まった地平線に向かって幾頭もの牝馬が跳ねているのを眼に浮かべた。あるいは、青い波、澄み切った空、銀の砂を眼に浮かべた。南国の生暖かいあの大洋の香を嗅いだ。それから、僕の傍ら、大きな葉のアロエの陰のテントの下で、褐色の肌、燃える眼差しの女が、両手を僕に廻してイスラムの天女の言葉で語りかけるのだった。

太陽が砂に沈み、牝ラクダや牝馬達が眠り、虫がその乳房の辺りをぶんぶん飛び回り、夕べの風が我々の傍らを吹きすぎていった。

そして夜が来て、あの銀の月が砂漠にその青白い眼差しを投げる時、星々が紺碧の空に輝く時、まさにこの時に暑く芳しいこの夜の静寂の中で、僕は無限の喜び、天上の悦楽を夢見るのだった。」¹¹⁾

インドの場合よりはるかに強烈な太陽の下、南国の砂漠と海。これらはエロスの夢と緊密に結び付きつつ、同時にこれと表裏を成して寂寥の旅を想起させ、孤独の情を漂わせる。ピレネー・コルシカ旅行の折、コルシカ島からの帰途の船上で夜の海を眺めながら彼は思いを馳せるのだ。

「同じ夜に同じ星々を眺め、砂原を大きな町に向かってゆっくりと進んで行くオリエントの人々のことを思った。」¹²⁾

さらに『十一月』では、

「ああ！ラクダの背の上で身をかがめている気分を味わいたい！行く手には、真っ赤な空、真っ茶な砂、延々と続く燃え立つ地平線、波打つ大地、頭上に舞い上がる鷺。空の一角には、ピンクの脚のコウノトリの一群、飛びすぎて雨水溜を目指す。砂漠の動く船にゆられ、太陽に目を閉じ、その光線を浴びる。聞こえるのはラクダの鈍い足音のみ、案内の

手綱引きが歌を歌い終わったところで、前進また前進だ。夕方になると、杭を打ち込んでテントを張り、ラクダに水を飲ませ、ライオンの毛皮の上に横になり、タバコを燻らし、ジャッカルを寄せつけないようにかがり火を焚く。砂漠の奥で吠えているのが聞こえるのだ。名も知らぬ、普段目にするものの四倍も大きな星々が天に瞬いている。朝になると、オアシスで革袋を満たし、また出発。孤独だ。風がひゅうひゅうと吹き、砂塵が渦巻きとなって舞い上がる。』¹³⁾

そして東邦旅行、エジプトの地での砂漠の実体験。

「孤独。——海は広大だ。——何かしら黒みを帯びた燦々と降り注ぐ光の不吉な効果。〔……〕僕等は夕方の五時まで海辺に沿って行く。右手に曲がると、所々砂漠の中にロゼッタの方角を示す煉瓦の円柱。砂はとても柔らかい。陽が沈む、空は溶けた朱だ。それから巨大な魚の骨の形をしたもっと赤い雲（一瞬、空は朱の板、砂はインクのようなのだ）。正面と左手、海とロゼッタの方、空は柔らかい青のパステル・カラーだ。並んで馬で行く僕等二人の影法師は巨大で、僕等の前を、僕等と同じく規則的に歩んで行く。同行する二本の大オペリスクのようなのだ。』¹⁴⁾

あるいはまた、次の体験。

「テントを張る。〔……〕——夕食。——テントの支柱に吊るした白い布地で出来た小ランタンの効果。——僕等の武器は叉銃にし、アラブ人達は火のまわりに輪をなして座っているか、砂に手で掘る溝の中で毛布にくるまって眠っている。彼等は屍衣に包まれた死体のようにそこに横たわっているのである。僕はそんなことなどをしみじみとかみしめながら、毛裏付外套に身を包んで寝に就く。アラブ人達は単調なカンツォーネを歌い、僕はある物語を語るその一曲を聞いている。こんなものが砂漠の暮らしたのだ。』¹⁵⁾

太陽と砂と旅の孤独。「まさにこれがオリエントであり、真の旅である。』¹⁶⁾冒頭近くで引用したバイロンが愛したトルコに対する感慨もさることながら、「もっと好きなのは、ベドウィン族と砂漠の焼けつくオリエント、アフリカの朱色の深遠さ、ワニ、ラクダ、キリンなのだ……」。¹⁷⁾さらに言えば、「砂漠が大好きなのだ。その空気は乾燥して、海辺の空気のように新鮮だ。』¹⁸⁾そして、旅の孤独を振り棄てるためかのように時に襲う、太陽と砂の空間に馬を疾駆させる衝動、歓喜。

「三時半頃、僕等はようやく砂漠の縁辺りに辿り着く。ここには三つのピラミッドが立っているのだ。僕はもはや我慢しきれず、馬を疾走させる。馬は沼地で足を取られながらも、全速力で駆けて行く。〔……〕猛り狂った疾駆。——思わず叫び声を上げる、僕等は旋風の中スフィンクスまで登る。〔……〕砂、ピラミッド、スフィンクス、すべて灰色で、ピンクの大なる色調に浸っている。空は真っ青、鷲達がピラミッドの頂きのまわりをゆったりと滑翔して旋回している。スフィンクスの前で立ち止まる。それは威嚇するように僕等を見つめる。マクシムは真っ青、僕は頭がくらくらしないか恐れ、興奮を抑えようとする。僕等は幾多の石に囲まれ、物狂おしく我を忘れて大急ぎでまた出発する。』¹⁹⁾

砂漠の地はインドの場合とは異なり実地の体験があるだけに、より一層フローベールの魂の内奥と響き合っているようだ。剥き出しの自然と直接対峙し、自然を畏怖しつつ享受する、あるいは融合すること、これが彼の汎神論の精髓で、太陽と広大無辺な砂、野生の自然そのものの砂漠は、海と同様にその発露の舞台となるのである。インドが一つの夢の故郷だとす

れば、砂漠は実現し得た憧憬の故郷であり、最初は漠として未分化であったフローベールのオリエントは、徐々にこの二つの故郷に集約されていく。そしてさらにオリエントを題材とするその一連の作品が証拠立てているように、それは最終的に砂漠を核として結晶化していったのである。

おわりに

イギリスの委任統治下のエルサレムに生まれたアラブ・パレスチナ人、エドワード・サイードによる『オリエンタリズム』²⁰⁾ (1978) の出現以後、この書の問題提起を受けることなしにもはや我々はオリエントおよびオリエンタリズムを語ることは出来ないだろう。それほどまでに、この書はオリエンタリズムと言う概念そのものの根底的な変革を迫るものであった。サイード以前、オリエンタリズムはオクシデントのごく一部の人々の幻想・夢の産物、言い換えればエキゾチシズム、とりわけ芸術上のロマン的異国趣味、異国情緒纏綿たる東洋趣味の世界を意味していた。ヴァレリーがいみじくもまた皮肉にも指摘したように、「『オリエント』なるこの言葉がある人の精神に無比の効果を生み出すためには、何よりも先ずそれが指し示すあの定かならぬ地に足を踏み入れたことがないことが必要だ。絵画、物語、読書、そしていくつかの品物によって、ひたすら出来る限り浅学にしてとりとめのない、出来る限り不正確な、さらには出来る限り混乱した形で、この地を知るに止めることが必要なのだ。そうすれば夢の素材が十分に揃うのだ。」²¹⁾ こうした現象と並行して、東洋学なるものが19世紀初頭から本格的に始まる。(付言すれば、冒頭で触れたデュ・カンの旅とその成果もこの文脈の中にある。) しかしそれも先の幻想の東洋趣味と究極では同根であって、同時代のオリエントの現実が抱える諸問題を意図的、系統的に排除した、言うなれば虚構の世界、オクシデントの人々が得手勝手に思い描く非現実の世界なのであった。要するに、オリエンタリズムとは英仏両国を中心とする西欧の帝国主義植民地支配とその下での生きた日常の現実を、あえて捨象することによって成立した虚像なのだ。と同時に、それは世界をオクシデントの側からオクシデントとオリエントに二分する、極めてヨーロッパ的思考法の所産でもある。サイードは前掲書においてこの語を「オリエントに対するヨーロッパの思考の様式」と先ず規定し、次にそれが「オリエントに対するヨーロッパの支配の様式」であったことを批判的に論証している。詰まるところ、「オリエントはヨーロッパの対話者ではなく、そのもの言わぬ他者であった」のだ。

フローベールのオリエント観もサイードが論難したヨーロッパの知のパラダイムを超えるものではない。ただ彼はシャトーブリアンの傲岸不遜なメシア的態度やラマルチヌの国家主義的エゴイズムとも無縁であった。オリエントにネルヴァルが自己の夢の痕跡を捜し求めたように、フローベールは既に見たごとく、己が故郷をそこに捜し求めた。そしてそれは、ハリー・レヴィンによれば、「フランスの田園風景に見られる灰色がかった色調とは対照的な華麗な色彩や、退屈な日常生活に代わる刺激的な見世物、あまりに見なれたものの代替物としての永遠の神秘を意味していた」²²⁾のである。このことは小説家個人に言えるのみならず、その作中人物にも当てはまることで、エンマにしてもフレデリック・モローにしても、彼等の現実逃避の夢は多分にオリエントと結びついた審美的色彩を帯びている。再びサイ-

ドの言葉を借りれば、「総じて、ネルヴァルおよびフローベールは、みずからのオリエント的題材にたえず彫琢を加えて、それをみずからの個人的・審美的企^{プロジェクト}ての特殊構造のなかにさまざまなやり方で吸収したのである。〔……〕彼等にとっては、自律的・審美的・個人的な事実としての作品の構造こそが問題だったのであって、どうすれば望むままにオリエントを効果的に支配し、それをグラフィックに記述することができるかということなどは、どうでもよいことだった。彼等の自我は、決してオリエントを吸収同化しなかったし、また、オリエントをオリエントに関する記録やテクスチュアルな知識（要するに公式のオリエンタリズム）と完全に同一視するということもなかったのである。」

1830年頃から、即ちちょうどフローベールの精神形成期に当たる時期であるが、オリエントによるヨーロッパの再生という極めてロマン主義的な夢が、時代の標語となっていった。例えば、1839年の『新百科事典』に曰く、「この新たなルネッサンス、オリエントとヨーロッパの融合が成し遂げられた時、一体どういふことになるのだろうか？」こうした時代思潮は、フローベールの未完の大作『ブヴァールとペキュシェ』の草案にもその痕跡が残されている。「人類の未来を暗く悲観的に見る」ペキュシェに対して、「人類の未来を明るく楽観的に見」、「現代人は進歩の過程にある」と考えるブヴァールは言うのである。

「ヨーロッパはアジアによって再生するであろう。歴史の法則は文明はオリエントからオクシデントに移って行くというものであるから。——中国の役割——二つの人類は究極には融合するであろう。」²³⁾

かく言わしめたフローベールの真意は必ずしも明らかではないが、文脈から見て少なくとも次のことは推測されよう。即ち、前段の「再生」の問題にしても後段の「融合」の問題にしても、こうした紋切り型の観念の内に極めて独善的なヨーロッパ中心主義が抜きがたく蔓延していることを鋭く嗅ぎ取り、これを諷しているということである。アジアはアジアのアジアであり、ヨーロッパのためのアジアではないのだし、ヨーロッパ主導の融合など融合ではないのだ。しかも現実のアジアは老いさらばえ、生命力が欠如しているようにヨーロッパ人には思える。フローベールが現に目にしたオリエントもそうであった。そこから先ずはアジアを再生させるという思い上がったメシア主義が勃興する。彼の場合はそうしたメシア主義とは一線を画するものではあったが、ともかくも審美的な水準でオリエントの復活を志向することとなる。即ち、彼の眼差しはオリエントの目下の現実をやりすごし、ひたすら過去の幻影へと向かうのだ。『聖アントワヌの誘惑』のエジプトの荒野にしても、『サラムボー』のカルタゴにしても、あるいはまた『ヘロディアス』の舞台となるパレスチナにしても、オリエントを題材とした彼の小説はかの地での実体験はもとよりではあるが、多くを文献渉猟による書物の中でのヴァーチャルな体験に負う、学術的に再構成された歴史物語なのである。フローベールの偏愛するインドと砂漠、——インドの地は確かにあくまでも見果てぬ夢に止まり、またその小説の背景となることもなかったが——、彼にとってのこの二つの故郷は彼独自のオリエンタリズムの原点であり、到達点でもあったのだ。世上リアリズムの小説家とされるこの作家は、その半面で希代のオリエンタリストであり、幻視家だったのである。

注

- 1) Gustave Flaubert, *Correspondance*, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, t. I, p. 709.
- 2) Paul Valéry, *Oriente Versus*, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, 1971, t. II, pp. 1041-1042.
- 3) Albert Thibaudet, *Intérieurs*, Plon, 1924, p. 93.
- 4) G. Flaubert, *Souvenirs, notes et pensées intimes*, Buchet-Chastel, 1965, p. 59.
- 5) G. Flaubert, *Novembre*, *Œuvres complètes*, Seuil, 1972, t. I, pp. 253-254.
- 6) *Ibid.*, pp. 271-272.
- 7) *Cor.*, t. I, p. 344.
- 8) *Ibid.*, p. 263.
- 9) *Ibid.*, p. 265.
- 10) *Ibid.*, p. 433.
- 11) G. Flaubert, *Mémoires d'un fou*, *Œuvres complètes*, Seuil, t. I, p. 232.
- 12) G. Flaubert, *Voyage aux Pyrénées et en Corse*, *Œuvres complètes*, Seuil, 1976, t. II, p. 454.
- 13) *Novembre*, p. 271. Cf. lettre du 15 mars 1842 (*Cor.*, t. I, p. 99).
- 14) G. Flaubert, *Voyage en Orient*, *Œuvres complètes*, Seuil, t. II, p. 559.
- 15) *Ibid.*, p. 562.
- 16) *Cor.*, t. I, p. 662.
- 17) *Ibid.*, p. 709.
- 18) *Ibid.*, p. 550.
- 19) *Voyage en Orient*, p. 562. Cf. lettre du 14 décembre 1849 (*Cor.*, t. I, p. 551).
- 20) Edward W. Said, *Orientalism*, Georges Borchardt Inc., 1978. なお、訳文は今沢紀子訳『オリエンタリズム』(平凡社, 1986)を基本とした。
- 21) P. Valéry, *op. cit.*, p. 1041.
- 22) Harry Levin, *The Gates of Horn*, Oxford University Press, 1963, p. 271.
- 23) G. Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, *Œuvres complètes*, Seuil, t. II, p. 301.